毛利元就の厳島合戦
渡海の陽暦年月日と
地御前での行蹟（二）

渡邊　通

—前号（一〇九号）よりの続き—

古語で「穴を掘ること」を「穿（ウガツ）」と云うので、縁起をかついで、「運勝（ウガツ）」と云う好文字を当てゝいた。又、土民は「牛の鼻」を連想して「鼻ぐり穴」とも云った。大正時代には村役場の説明板も立っていた。

又、この半島は元禄時代の庄屋地図では「もとどり山」とも云っている人頭の前髪のことを「モトドリ」と云うので、当時、この半島に小松が茂って、珍らしかったか、又は、南北朝時代の隠語で、秘密の連絡文書の意味で、宮尾城との秘密の連絡場所であったか、興味がある。又、この半島の南側、つけ根を「鼓が浦」と云っていたが、理由、沿革は不明。

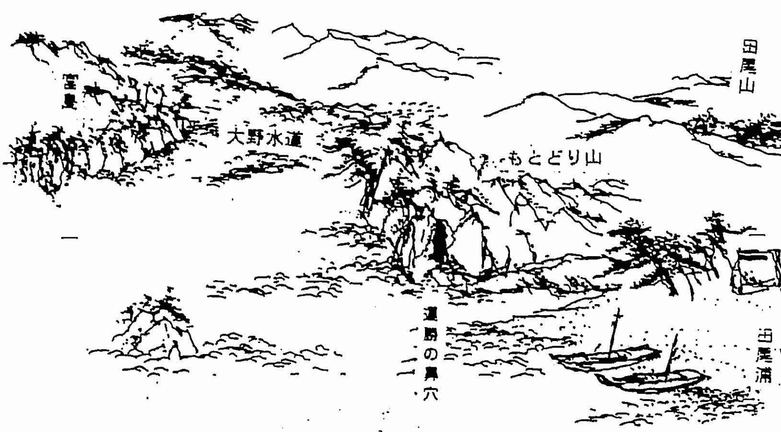
昭和四一年頃から、廿日市桜尾城の土地切下げの時、排土で、この半島の北側海に一六万㎡の田尻新地が出来、続いて同五十一年年には、此の半島も掘り崩されて、共に宅地と化した。

四、元就本隊の厳島渡海用の太縄造り

元就自身がこの戦斗に於て、太縄伝いに厳島の東南端、末陶葦の背後に出たことは、史上、明白であるので省略する。扨て、この太縄を誰が造ったか。久しく不明であったが最近判った。

地御前の小林家（画家、千古の出身家）では、後に安価で丈夫なマニラ麻縄の出現迄、太縄を作り、四国方面に迄、販売していた。ところが、最近、幕末の「沼田郡相田村正伝寺の宗旨改帖」の発見に依り小林家は武田家の関係者であることが判った。

大野水道周辺地形概念図



五、阿品、田尻海岸の墓石群

大野の瀬戸で溺死、浮流し又は島内で殺された陶方の数千人の遺体は、古来の風習で、対岸の赤崎又は阿品に葬られた。中には遺族が後に、石塔を作ったものがあり、又上田尻には旅僧が阿弥陀坊を作った由。明治時代に至り、海岸に道路、鉄道などが開設された時に、岸壁として、忘失したものも有った筈だが、田尻地区一般に、宅地造成された時、阿品の特思家が、七ヶ所の残存墓石を上田尻の一ヶ所に集積して、合塔を設けられた。その数、凡そ三十餘基分に達した由。昭和五十七年のことである。

六、陶方の諜報船の出没

敵方の諜報船が地御前その他に出没したことは当然で、毛利方文献にも散見される。岡山の儒者、湯浅常山もその著「常山紀談」で灰床山付近での双方の対談振りを紹介している。

七、宗教活動に便乗した諜報活動

一五、六世紀は佐伯郡でも寺院は自力他力両派の転換期で、大野町史編集者中丸勞氏の調査に依れば、武田城関係の正傳寺が一五五四年に銀山城落城後、「大野村北山地区の寺田」と遺称された地に、地方民が「常通寺」と称する寺を建て、土地は合計三反歩を所持して居たが、永順、浄念を経て三代目僧玄正の時に東方の地御前に移転して智秀山西向寺と改称した。移転の時期は西向寺伝では寛永二年（一六二五）と称するが、「大野村一六〇一年の福島時代の土地測量台帳」では、その年以前の転出と明示している。

右転出の事由は、東方、三宅地区に在った正伝寺系の説教所の担当僧が欠け、西向寺が兼務するため、中間地の地御前に移転した由である。移転当時、地御前の正行寺は天台宗であった。佐伯郡誌）

常通寺が進出当時、大野村には陶家が代々管理した自力宗の護安寺が在り、又、兵力差や地形上、交戦は毛利方に不利なのを回避するため、毛利方は謀略に力めた。厳島合戦後に護安寺は焼討され、更に二年後には防長二国も完全に毛利方に制圧された、護安寺跡には他力派の西教寺も建った。斯くて、常通寺は後顧の憂い無く、信徒を残して（更地説教所）、地御前に移転した。